

古文書倶楽部

【発行】

秋田県公文書館

2019.3

第88号

御家老、江戸に上る

『岡本元朝日記』より

春は旅立ちの季節ですね。秋田県を離れて上京する方も多いと思います。現代は飛行機で一時間十分、秋田新幹線では最速三時間三十七分で東京に到着しますが、江戸時代は歩いていくことが一般的でした。現在当館で刊行中の『岡本元朝日記』の筆者、岡本元朝は江戸時代中期に秋田藩の家老などを務めた人物ですが、宝永元年（一七〇四）四月、約一年間の江戸屋敷勤務のため、江戸に上りました。

四月七日（現在の暦では五月十日）四ツ時（午前十時頃）、親類などに見送られて久保田（秋田）を出発しました。さらに親しい人々は牛島まで同道し、別れを惜しみました。この日は境（大仙市）に泊まっています。

八日は境を卯の半刻（朝六時頃）に出発し、神宮寺村で昼に休んだ後、六郷（美郷町）に八ツ時（午後二時頃）到着しました。

九日には金沢八幡神社（横手市）に参詣しています。同社は後三年合戦の後に源義家が藤原清衡に建立させたという由緒があり、義家の弟・源義光の子孫である佐竹氏からも崇敬を受けました。この日の宿泊地は湯沢で、所預である佐竹南家から供応されています。

当館の頒布書籍、『岡本元朝日記』第五巻が三月下旬に刊行します。定価四千元、お求めは秋田活版印刷まで。（〇一八八八—三五〇〇）

十日は卯の刻（朝五時頃）湯沢を出発し、昼頃に藩境を越え、現在の山形県域に入りました。峠は厳しく、全行程の中で一番の難所だったかもしれません。昼は及位村（山形県真室川町）で休み、金山（山形県金山町）に泊まっています。

十二日は朝は卯の刻に山形を出発し、七ツ時（午後五時頃）に関（宮城県七ヶ宿町）に到着しています。この日が最も移動距離が長く、約四五・七kmを踏破しています。途中「奈良け之茶屋」（山形県上山市榎下）で昼休みを取っていますが、峠を越え、日没前に予定の宿場町につくための強行軍だったと思われます。

十三日には羽州街道に別れを告げ、奥州道中に入りました。二十日に草加宿（埼玉県草加市）に着き、身支度を整え、翌二十一日、江戸浅草

の秋田藩邸に到着しました。全行程は現在の道路で計算すると約五五七km、馬や駕籠を利用した記述はありませんので、大半は徒歩だったと思われます。

岡本元朝は江戸で家老としての職務に当たるとともに、幕臣や大名・他藩の家臣などとの交流を深めました。今春、秋田県を離れる方々にも多くの良い出会いがあることを祈っています。

【煙山英俊】

岡本元朝が歩いた江戸までの行程

出発地	到着地	距離(km)
秋田	境	24.4
境	六郷	33.9
六郷	湯沢	31.5
湯沢	金山	41.6
金山	尾花沢	36.7
尾花沢	山形	39.8
山形	関	45.7
関	福島	37
福島	郡山	45.3
郡山	白河	38.4
白河	大田原	38.6
大田原	宇都宮	43
宇都宮	古河	45.5
古河	草加	42.7
草加	江戸(浅草)	13.1
合計(km)		557.2
1日の平均移動距離(km)		37.15

※移動距離は現在の道路で計算しています。



昨年の古文書解読講座の教材として「瓊浦筆記」を使用しました。瓊浦は「ケイホ」と読みます。瓊には「玉（たま）」という意味があります。

古い時代、今の長崎市あたりは「玉の浦」と、美しい表現で呼ばれていたようです。そのせいか「瓊浦雜綴」・「瓊浦の秋」・「瓊浦遊記」など、瓊浦を書名の一部にした書物も多く出されています。学校名や校歌の歌詞にも用いられています。

この資料は幕末の嘉永七年（一八五四）八月（十一月に改元し、安政となる）、長崎で行われた日英会談の模様を書き表したものです。その頃の日本は、前年の嘉永六年六月にアメリカのペリーが浦賀に、七月にはロシアのプチャーチンが長崎に来ており、それらの対応で大変な状況にありました。一方イギリスは、ヨーロッパでロシアと戦争状態にあり、日本近海でロシアの軍艦やその拠点を攻撃しようという考えを持つていました。

会談の一月ほど前の閏七月十五日、イギリス東インド艦隊司令官ジェームス・スターリングは、三隻の船を従えた旗艦ウインチェスター号に乗って長崎に入港します。スターリングはすぐに長崎奉行宛の書翰を提出しました。

書翰を受け取った長崎奉行は、これに自分の意見を加えて江戸へ送り、老中の指示を待ちま

す。しかし、この頃の日本の通信事情はイギリスと違い、まだ早馬・早飛脚の時代であり、二日ほど経ても返事が届きません。これにしぶれを切らしたスターリングは、八月六日、長崎奉行に直接江戸へ向かう意向を示しました。

その後ようやく老中の指示を得た長崎奉行は八月十三日、奉行所の西役所でスターリングと会談することになりました。史料に名前の見える出席者は、日本側は長崎奉行水野筑後守忠徳、目付永井岩之丞尚志、イギリス側はスターリングですが、ほかに双方の通訳も同席しました。

筑後守

[illegible][illegible]

会談は筑後守の「お国を出てから長く船中に居られ、退屈なさったことでしょう。一日も早く面会したかったのですが、ようやくお会いできて大変喜んでおります。」という発言で始まります。これに対してスターリングは「この度の一件は大変重要なことですので、少々長引いても構いません。長い滞船中、御奉行にはご親切にしてくださいありがとうございます。帰国後にこのことを国王（ビクトリア女王）にお聞かせすれば、国王もさぞお喜びなさることでしょう。」と答えました。右に載せた史料には、こ

の時の両者のやり取りが記されています。会談は八月十三日、十八日、二十三日と三回行われましたが、その間に書翰のやり取りもありました。

嘉永七年八月二十三日、三回目の会談で日英約定が調印されました。その際、スターリングが「日本の約定書に調印なさるところを拝見したいのですが。」と言うと、筑後守は「承知いたしました。あなたも、ただいまこの席で調印して差し出したのですから、私も同様にしてお渡しいたしましょう。」と、応じています。調印を済ませたスターリングは八月二十九日、長崎を出航しました。

長崎奉行の水野筑後守と目付の永井岩之丞の二人は、その後、勘定奉行や外国奉行を務め、外交交渉にも当たっています。水野は文久元年（一八六一）に小笠原諸島へ派遣され、その当時はまだ帰属の決まっていなかった島の調査や開発をし、後にこの島々を日本の領土とすることに貢献しました。

今回ご紹介した史料は国文学研究資料館の所蔵ですが、当館では写真帳(資料番号…小貫二五C―二四五)として公開しています。この「瓊浦筆記」と比較するために同じ書名の資料をある大学から取り寄せたところ、その表紙には「瓊浦筆記」(完)と書かれており、内容は日英会談が行われる前年の十二月、同じ長崎で行われた日露会談の様子でした。どうやら、前後して長崎で行われた日露・日英の会談をそれぞれ文書にし、まとめたものが「瓊浦筆記」であったようです。

【藤田誠治】